特別講演

明治の仏教
――真言宗を中心として――

東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授　末木文美士

はじめに

末木です。ご丁寧にご紹介いただきまして、ありがとうございます。今回、貴重な機会にお話しさせていただくこと、大変うれしく存じます。本当ですと、弘前に、また、深浦のほうに伺いまして、皆さんと一緒に議論したり、あるいは、資料も見せていただいたりできれば本当によかったのですが、こんな事態でオンラインという形になりました。でも、深浦、弘前、そして東京、さらに、それ以外の地域の方もご覧いただくということで、新しいスタイルで参加させていただくのも意義のあることかと思っております。

今、これまで皆さんのご発表をうかがわせていただきまして、深浦の円覚寺が重要なお寺であり、重要な資料をたくさん持っているということ、そして、その中で海浦義観という方が、非常に重要な方であることがよく分かりました。そこで、雑駁な話になりますが、そういう明治の仏教の背景といいますか、もう少し全体像的なことを、特に円覚寺とも関係します真言宗に重点を置いて見ることができればと思っています。

一般的には、明治維新で神仏分離、それに伴う廃仏毀釈で仏教は非常に被害を受けたと考えられています。特に真言宗系統は実際そうですし、また、修験などはつぶされてしまいまして、そのために海浦義観などは大変苦労して、その復興に努めるわけです。

ただ、仏教界全体にとって果たして神仏分離がマイナスの方向であったかというと、必ずしもそうも言えないところがあります。真宗（浄土真宗）の系統などはわりと明治政府とも仲良くしまして、早く復興して、立ち直っていくわけです。そのように宗派によってかなり違うところがあります。ですから、一概に言えないのではないかと思います。ここでは、明治維新の際の宗教界、仏教界の動向を大まかに見た上で、その中でも特に真言宗に焦点を当て、真言宗を立て直すのに非常に力のあった土宜法龍という方を中心に少しお話したいと思います。この方は明治の頃の変わり者の天才と言われる南方熊楠という人物と非常に親しく交際していたということで今まで知られていますが、それだけでなく真言宗の立て直しに大きな役割を果たした重要な人物です。

ちなみに、先ほど尾崎名津子先生のお話の中で、深浦円覚寺に寄贈した人の名簿を画面で見せていただきましたが、その中にも土宜法龍の名前が出てきておりました。そういう意味で、やはり関係があったのだなと思って拝見しておりました。

1、近世の仏教を捉え直す

まず、幕末から維新という時期の仏教を考えていく前提として、近世、つまり江戸時代の仏教の状況を、ごく簡単にだけお話ししておきたいと思います。

従来、江戸時代の仏教というと、仏教は堕落して全然だめになってしまったので、だから、近世は儒教の時代であるというふうに考えられていました。また、近世になると、社会全体が世俗化して、宗教なんて意味をなくしていくのだと考えられていたかと思います。ところが、どうもそうではないのではないかというのが最近の研究であります。これは先ほどの原克昭先生のお話などでも、原先生の場合は神道ですが、神道

も中世から近世には仏教と密接に関係しているわけで、そういうふうに見ていくと、近世においても、中心になっているのはやはり仏教です。ただ、中世までは仏教の独壇場といいますか、ほかの宗教はほとんど力を持っていなかったわけです。それが、近世になると、そのほか、例えば、キリスト教も入ってきますし、もちろん儒教も盛んですし、いろいろなほかの宗教、思想が出てくる中で、仏教もその中に入り込んで、もまれるといいますか、一緒になって活動していくという時代であったと考えられます。それについては、私の『近世の仏教』（吉川弘文館、二〇一〇）という本に、非常に大雑把ですが、書いてみました。

近世の細かいことは今は立ち入りませんが、近世の中でも、実は時代的な変化があります。近世の初め頃はまだ中世の延長であって、例えば、政治の世界も仏教界が中心になって動いているわけです。有名な天海という人が家康を祀った東照宮を作ったりするわけです。そういうわけで、初めの頃は仏教は幕府の中核に入っていますが、それがだんだん転換していくのがちょうど十七世紀の終わり頃で、いわゆる元禄の時代です。五代将軍の綱吉と柳沢吉保が活躍する時代ですが、この時代は、評判があまりよくない時代です。例えば、生類憐みの令などというのが出されて、人々はそんなことで苦労しました。

この頃は、一方では仏教を採用しながら、もう一方では、例えば、荻生徂徠などの儒学者が初めて採用されるようになります。だんだん儒教の時代に移っていくわけです。近世の中頃は、仏教もあるし、儒教も、それから、この頃になって、本居宣長などが出て、外国から来た宗教ではなくて日本古来の学問をするのだ、という考え方も出てくるわけです。

大都市の江戸とか大坂を中心としながら、全体的にだんだん合理的な思想が広まりますが、やはり農村部では仏教が中心だったのではないかと思われます。近世の農村の仏教の展開というのは、もっと研究してみる必要があるかと思っています。

近世はおもしろいことに、百年ずつぐらいで大体思想の動向が変わっていきます。近世の末期といいますか、十九世紀になりますと、今度は社会が大きく変動してきます。ロシアや欧米の船が近づいてきたりして、慌ただしくなってきます。

そういう中で、思想や宗教がどうなっていくかというと、一つは、神道がものすごく盛んになってきます。その中心になったのが平田篤胤です。平田篤胤は東北の秋田出身の人ですが、江戸に出まして、平田というのは養子に入った姓で、秋田とは縁が切れてしまいます。その辺よく分からないところがあるのですが、非常におもしろい人物で、宗教復興の中心になっていきます。この一派がその後、明治維新を招く尊王攘夷の運動の中心を担います。弟子たちもいろいろな人たちがいて、傾向も大分違っているのですが、その詳しい話には今、立ち入りません。

もう一つは、近世が儒学、あるいは、儒教の時代と言われますが、本当のことを言うと、儒教が盛んになるのは江戸時代も終わりになってからです。この頃になると、寛政異学の禁というので朱子学中心という政策が決まって、昌平坂学問所に大勢の人が学びに行きます。それから、各地の藩校は、江戸時代の古くからあるかと思うと、ほとんどが実は江戸の終わり頃につくられています。これが結構重要な意味を持つのは、明治以降の中等教育は、今では高校ですが、当時の藩校の伝統を継いでいます。したがって、その頃の設立精神みたいなものが結構今でも生きているところがありまして、これもなかなかおもしろい問題があるのですが、これも今は深入りはしないことにします。そんなことで明治維新が起こるわけです。

2、明治維新と神道・仏教

明治維新というと、神道復活で、廃仏毀釈だと単純に思われているの

ですが、実はそれほど簡単ではありません。ご承知のように、明治維新の中心になったのは長州藩と薩摩藩ですが、特に長州がその中心を担っているわけです。長州、今の山口県は、実は浄土真宗が盛んなところです。浄土真宗という名前は第二次世界大戦後になって初めて使われるようになったもので、仮に使いますが、特に西本願寺系、今の本願寺派が長州に多かったのです。長州藩は西本願寺系と非常に親しくて、また、西本願寺側も勤皇、つまり、天皇方に肩入れするわけです。実は、東本願寺のほうは幕府寄り、西本願寺のほうが朝廷寄りということで、勤皇僧と言われるような西本願寺系の人たちが、長州藩の武士やその他の人たちと一緒になって尊王攘夷の運動に加わるわけです。そのようなわけで、長州藩は特に西本願寺と深い関係にあって、仏教ともわりと親しかったのです。そこで、西本願寺系は新政府に対してもかなりの力を持つようになります。

それに対して、お隣の津和野藩は小さい藩で、今も津和野はきれいな観光地になっていますけれども、津和野藩は神道側の反仏教の中心になっています。亀井茲監が藩主で、明治政府で復活される神祇官の中心になっています。津和野藩の神道の指導者が大国隆正という人で、この人は明治維新後にちょっと政府に入りますが、すぐ辞めてしまいます。この大国隆正のお弟子さんに福羽美静というのがいまして、この人が実際上の明治初期の神道政策の中心を担うことになります。そのほか、薩摩なども反仏教系です。元々長州と津和野というのはすぐ近くですので、お互い同士は非常に仲良くやっていたわけです。そのような状況で明治維新を迎えて、明治初期の宗教政策がつくられていくわけです。

その中で、最初は神道復興ということで神道側が頑張ります。そこで神仏分離が行われ、また、廃仏毀釈の運動が各地に起こることになります。政府の組織としては神祇官というのがつくられまして、律令組織が復活して太政官と神祇官が並ぶわけです。ところが、これは二年位で神祇省に格下げになる。単純に格下げというのではなくて、神道側自身の裏側の意図もあったようですが、そこは今、立ち入りません。ともあれ、当初神道中心の政策が行われるのですが、それに対して、どうも神道をいわば国教みたいに扱うというのは、ちょっとまずいのではないかと、仏教側がここで反撃してくる。特に、先ほどの新政府の中核をなす長州藩、それと親しい西本願寺系が反対の中心になっていくわけです。

もう一つは、今度は欧米と交際していかなければならない。そして、日本も欧米に追いついていかなければならない。そういう中で、欧米側からはキリスト教を認めろという強い要求が出てきます。そうすると、どうも神道中心の国家というのは難しいのではないかということで、次に考えられたのが、神道だけでなく仏教も一緒にやりましょうということでつくられたのが教部省です。

そういうわけで、最初は仏教側、特に、西本願寺系が教部省をつくる運動の中心になって、それでできたものです。ところが、実際でき上がってみると、かなり実際上の政策としては神道寄りの内容を持っていたことから、今度は、最初、それをつくれと言っていた真宗の、特に西本願寺系が反対をするわけです。その中心運動を担ったのが島地黙雷という人です。それで教部省の政策というのは、一番大きい宗派である真宗系統が反対してしまうので、うまくいかなくなってつぶれてしまいます。そこで宗教関係は内務省に移っていく経緯になるわけです。そうした過程を経て、明治憲法ができ上がって、その中で宗教の自由が認められることになります。

国家神道という言葉は漠然と使われていますが、厳密には、国家神道というのはこの後、一九〇〇年に内務省の中でも社寺局から分かれて神社局というのがつくられるということがあって、それ以後を国家神道と呼ぶのがいいのではないかと思っています。明治の初め頃を国家神道と一括してしまうのには、私はちょっと反対です。

もう一遍その辺のところを考えてみますと、よく言われるのは、先ほどもちょっと触れたように、廃仏毀釈というと仏教はみんな被害者で、神道が悪いことをして仏教はそのために被害を受けたのだと言われるのですが、最初のほうで問題提起をしましたように、それほど単純ではないということで、もう少しその辺を考え直してみます。先ほど来のお話してきたことからも分かりますように、明治初期の真宗の系統は、新政府とものすごく仲がいいわけです。ですから、それほど単純に明治政府が仏教を切って捨てたというふうにはどうも言えないわけです。

真宗系統は、もともと神仏分離をかなり歓迎する面がありました。というのは、真宗は神祇不拝の動向が江戸の後期にはかなり強くなって、神様を祀らない、神道と仏教は別だという立場をとっています。ですから、神仏分離というのは、真宗にとっては、むしろわりと受け入れやすい政策です。しかも、真宗の教理は、非常に合理化して近代化しやすい面があります。

それでは、明治になって一番批判されたのは何かというと、仏教の中の密教であります。密教では、呪術とか加持祈禱とかをやるわけです。こういうのは前近代的で、古くさい封建時代の民衆の迷信だとされます。これからは近代になって、ヨーロッパの新しい科学が入ってきて、新しい文化が入ってくる。そういう中で、古くさいものは全部捨ててしまえといったときの一番の批判対象になったのが密教です。それに対して、真宗は、もともとはその中にも門主信仰みたいなのがあって、決して、近代の信仰とそっくり合致するわけではないのですが、わりと整理しやすく、合理化しやすい。つまり、阿弥陀様を信じればいいという形で、キリスト教の一神教などと非常に近いタイプに合理化しやすいわけです。

それから、ほかにも大きい要素がありまして、明治五年に肉食妻帯蓄髪令が出され、坊さんが肉食妻帯したり、髪を伸ばしてもいいということが許可されます。これは実は宗教政策上ではなくて、坊さんを一般の戸籍の中に入れていくという政策で、新しい戸籍制度、さらに言うと、それが徴兵制度に結びつくわけですが、それを整備する中で、坊さんも一般人にしてしまえということで、肉食妻帯蓄髪が許可されました。これも喜んだのは真宗です。今まで真宗の人たちは、江戸時代も肉食妻帯しているのですが、何か肩身が狭かった。仏教界の中でこれは本当の仏教ではないと言われて、お前たちは戒律を守ってないではないか、みたいな批判をされて防戦に回っていました。それが、今は自分たちこそ新しい時代に合致した仏教なのだと、堂々と言えるようになりました。ほかの宗派は困るわけです。今まで独身主義をとっていたのに、いきなり肉食妻帯などと言われても対応ができない。そういう点でも、真宗が非常に強い。

それともう一つ、真宗というのは、信仰を通してお寺と門徒が結びついている。わりと小さいお寺で、必ずしも土地を軸としないで、門徒さんとの関係の中でその寄進によってお寺を運営していくという面が強かった。それに対して、ほかの仏教の宗派というのは、すごく大きい土地を持って、その土地を貸したりして土地収入で経済を担っていました。ところが、明治になって、上地令で大きいお寺はみんな土地を取り上げられてしまうわけです。その中で、土地に頼らない真宗は、わりと生き残りやすい。そんな面もあって、真宗にとって明治政府の宗教政策というのは、そう悪くはないという感じが強かったわけです。それに対して、真言宗、密教のほうは非常に大変な状況に追い込まれていくわけです。

3、真言宗の近代化

ここで基本的なことを申し上げておきますと、密教には二つの流れがございます。真言宗ともう一つは天台宗の流れです。真言宗の流れは東密といいまして、天台宗の流れは台密といいます。天台宗は密教と同時

に顕教の教義も持っていましたが、真言宗のほうは密教オンリーということです。さらに真言宗も実は二つの系統がありまして、金剛峯寺方と伝法院方に分かれます。

この伝法院方というのは、もともと覚鑁という人が中心になって、これは院政期の十二世紀前半の人ですけれども、この人が金剛峯寺方の中核をなす、高野山の中心と喧嘩をするわけです。改革運動を起こして新しい教えを入れようとしたために、金剛峯寺の伝統派からは追われて、高野山のふもとの根来に下ったのですが、その後も高野山の中核である金剛峯寺の系統と、覚鑁の流れは仲があまりよくなかった。

それが決定的に大きく違ってくるのは、十三世紀ごろに覚鑁系のほうから頼瑜という学者さんが出ます。この人が今までの真言宗に対して、細かいことは今、申しませんが、違う説を唱えます。そうなってくると、単にお互い仲が悪いというわけではなくて、教義的にも違いが出てくる。そこから古義と新義の二つに分かれ、さらにそれが幾つにも分かれていくというのが、近世から近代を迎える頃の真言宗の状況です。

真言宗は、維新によって非常に大きい打撃を受けるわけです。先ほど言ったような浄土真宗系統と正反対の位置づけであったので、迷信的だ、呪術的だ、近代に合わないと非常に批判されます。その他でも、大きな土地を持っている場合が多いとか、出家独身主義を守っているとか、いろいろ不利な状況がありますが、特に真言宗にとって重要な問題としては、それまで皇室とものすごく密接な関係を持っていました。御所の中にも祈祷の場があって、そこに真言宗の坊さんが行っていた。あるいは、天皇の子どもの中で、もちろん皇太子になって跡を継ぐ人とかは別ですが、そうではなくて、天皇の子どもだけれども役職を持てないような人たちは、いわゆる門跡といって、大きい真言宗の寺などの住職になるわけです。女の子なども、いい結婚相手があればそれでもいいわけですが、そうでないと尼さんになってお寺に入る。そうした形で真言宗は皇室とも密接な関係を持っていたわけです。ところが、明治になると、天皇を中心とした国家体制がつくられる中で、仏教との関係はみんな切っていくわけです。そういうことで、今まである意味では特権的な要素を持っていた真言宗が非常に力を失ってしまう。そういう中で、それぞれの真言宗の大きなお寺がだんだん分裂して争い合うような状況になっていきます。今では十六派あると言われています。

明治以降でもどんどん分かれようという人たちと、もう一方で、真言宗が力を持つためには統一していかないといけないという人たちとが出てきます、その統一派を画一派と呼ぶのですが、今からお話しします土宜法龍というのは画一派の中心人物でした。

真言宗と関係して修験道のことも触れておきますと、修験道というのは、江戸時代にはそれまでバラバラでいろいろな形であったのが、二つの系統にまとめられていきます。真言宗系統と天台宗系統です。真言宗系統は本山派といいまして、これは醍醐寺の三宝院が中心になっています。それに対して、天台系は当山派と呼ばれますが、京都にある聖護院が中心になっていくわけです。そういうわけで、寺の所属にはなっていくのですが、修験というのは、それぞれの地域の山伏が在家で普通の生活を営んでいるところが多いわけです。信者さんのお世話をして、旅館のような役割も果たします。そういう在家の立場をとって、それぞれの地域に密着していくと同時に、山伏として移動もできる。それによって、それぞれの地域にいろいろと新しい文化をもたらしていく。江戸や京都で出版された本などが結構遠くの地域に残っているようなことが少なくありませんが、これは坊さんの移動によるもので、とりわけ修験者がそういう場合、非常に重要な役割を果たします。

また、地域医療という面でも大事です。近代以前は西洋式の医学はもちろんありません。そうすると、医術を担ったのはどういう人たちかというと、一つは儒者です。医師になりたい人は、まず儒教を学び、それ

から中国の医学書に進みます。もう一つは、修験の山伏です。これは呪術と結びつきながらも、同時に、医療の技術や薬草の知識も持っているというわけで、非常に生活と密着した形で、修験が至るところで大きい役割を果たしていたわけです。

それが神仏分離によって、修験というのがある意味、一番被害を被る。つまり、修験というのは神仏習合であって、神道だか仏教だか分からないではないかということから、修験が禁止されてしまいます。そういうわけで、海浦義観などが何とか修験を復興させようと、大変な努力を要することになります。

4、土宜法龍について

残り時間がやや短いですが、最後に土宜法龍という人を中心に、明治における真言宗の復興についてお話しします。この姓ですが、真言宗では「土宜」は「どぎ」と濁って読みます。ところが、読み方はいろいろあって、正確には分かりません。この人は、今からお話しするように、アメリカからヨーロッパを周っているのですが、どうも向こうでのローマ字資料などを見ますと、「とき」と濁らないで読んでいまして、どちらが本当か分からないのですが、今は真言宗の読み方に従って「どぎ」と読むことにしたいと思います。

一八五四年に名古屋で生まれて一九二三年に亡くなっていますが、先ほど話が出た海浦義観さんは一八五五年生まれで一九二一年に亡くなっています。ほとんど同世代です。そういう意味で、お互い本を送ったりとか交流もあったようで、ちょっと興味深いところだと思います。

私がなぜ土宜法龍さんに関心を持っているかと申しますと、京都に高山寺というお寺があります。明恵上人で有名な京都の北山のほうのお寺で、非常にいいところです。今頃、紅葉がきれいなところです。その高山寺の古い写本の調査をずっと長くさせていただいているのですが、土宜法龍という方はそこのご住職をされていました。もっとも兼務で、主に高野山とかほかのところにいて、時々行くくらいだったようですが、そこのご住職をされていて、今、そこに資料がかなり残っているのです。一番有名なのは、後ほど触れます南方熊楠との交流関係です。熊楠と法龍は膨大な量の手紙の交換をしています。南方から土宜法龍に宛てた書簡が高山寺から相当数出てきまして、翻刻出版されていますが、それだけで小さい字の二段組みでかなり分厚い一冊になるくらいのたくさんの書簡が見つかっています。

その書簡だけでなくて、実は最近になって、ほかにも土宜法龍さんの資料があることが分かりまして、それをこれから少し調査しましょうと言っていたらコロナで調査に行けなくなってしまいました。そんなことでちょっと残念なのですが、今、段ボール箱が三つ、それに写真とかが別になっておりますし、さらにもう一箱あるみたいです。非常に重要な資料がたくさんありますので、何とか今後調査したいと思っているわけです。

そこで、土宜法龍という方はどういう方かといいますと、五歳で出家しまして、その後、高野山に上るわけですが、普通の坊さんと違って興味深いのは、慶應義塾で、短い期間ですが、勉強しています。福沢諭吉からも直接学んでいるみたいです。新しい学問を熱心に学んでいまして、その後、シカゴで万国宗教会議というのが行われますが、その時に積極的に日本の仏教の代表者の一人として加わっています。さらにその後、ヨーロッパを周り、アジアを周って、世界一周して帰ってきています。すごい勉強家で、その間に向こうのいろいろな資料とかをたくさん集めてきていまして、その時に、イギリスで南方熊楠と知り合います。その後、御室派管長になったりいろいろな役職に就いて、いわばお偉いさんになっていくわけです。最終的には高野山の管長さんになる、いわ

ば真言宗のトップに上り詰める方なのですが、ただお偉い方というだけでなく、一生懸命いろいろ新しいことを勉強した学者でもあり、南方熊楠というような、これは非常に変わった人ですが、そんな変人ともずっと長く付き合っています。南方熊楠が独創的な思想を展開していく、その陰の力にもなった、そういうものすごくおもしろい人物です。

土宜法龍には一冊本の分厚い全集が出ていますが、全集といっても全部集めているわけではありません。『木母堂全集』というのですが、「もくぼ」というのは、「栂」という字を分解したものです。「高山寺」のある場所を「栂尾」といいます。それを分解して自分の号にしていました。

先ほど言いましたように、一八九三年にはシカゴの万国博覧会の際に行われました万国宗教会議に出ています。シカゴの万博は日本にとってもとても重要な意味を持っています。万国博覧会は、この前にロンドンとかパリで行われて、日本もそれに出品しているのですが、このシカゴの万博が開かれた一八九三年は、時代状況から言いますと、その前の一八八九年に大日本帝国憲法ができまして、やっと日本も近代国家の仲間入りをしまして、これからさらに発展しなければという時代です。そのために一八九四―九五年には日清戦争、十年後には日露戦争と戦争につながってくる時代でもありますが、日本がだんだん近代国家になっていく。そういう中で、今まで不平等条約を押し付けられていたのを、対等の条約にしなければならない。そのためのアピールをあらゆる方面で展開していた時代でした。その一環としてシカゴ万博にもすごく力を入れます。

日本からはどういう形で参加したというと、日本館として鳳凰殿という日本風な立派な展示館を建てます。これは宇治平等院を模したと言われるもので、その中は、時代ごとに、平安時代、室町時代、江戸時代というふうに、その時代らしい部屋を再現して、日本文化の粋を見せる、そういう展示の仕方をしています。それをやった中心人物は誰かという

と、岡倉天心という有名な人です。

岡倉天心は一八九〇年に東京美術学校、今の東京芸術大学を開いて、初代校長になっています。ここの美術学校から横山大観とかいろいろな有名な画家などが出るわけですが、近代的でありつつ、しかも日本的であるというその両面性を狙いました。日本風を重視するということで、衣冠束帯のようなすごく変わった制服を制定します。これはものすごく評判が悪くて、岡倉天心はそれで学生から反対されて、結局学校を去ることになります。それはともかくとして、このようにシカゴ万博は日本の国を挙げての博覧会参加でした。

その中の一環として万国宗教会議が行われます。これは初めて世界中の宗教者が一堂に集まる、そういう大きい会議です。それぞれの国の宗教者が、それぞれ自分たちの衣装に身を包んで壇上に並んだ姿は、写真で見ても壮観です。神官の格好をした日本の神道実行教の代表の柴田礼一は、その衣装が大変評判だったと言います。お坊さんたちもそれぞれの宗派の衣を着用しています。この万博の時は、それ以外にもいろいろな分野の会議があったのですが、宗教会議は初めてだったこともあって、重要な意味を持っています。

そのときに日本側からどういう人が参加したかといいますと、神道側からは、今申しました柴田礼一という神道実行教の管長です。この頃、いわゆる国家神道がボツボツ確立していく途中で、神社神道系の人はこういう場に出てくるのは問題があったようで、いわゆる教派神道に属して、神道の中でもわりと政府とべったりでないような立場の神道の人です。

それから、仏教側では天台宗の蘆津実全という方。それから、これは有名な人ですが、臨済宗の釈宗演、円覚寺の管長さんで、鈴木大拙の師匠です。それから、土宜法龍で真言宗。浄土真宗のほうでは、最初はもっとトップの人が出ると言われていたのですが、最終的には八淵蟠竜

という人が参加しました。それから、その次の平井金三という人もなかなかおもしろい人で、英語が非常に堪能な人で、宗派には属さないで、後にはキリスト教などに近づいていくような独特な人です。

あと、キリスト教側から小崎弘道。彼は同志社大学の総長も務めて、日本のキリスト教の初期の代表的な人です。それから、当時、ハーバード大学に留学中だった岸本能武太。彼は日本の宗教学の草分けの一人です。この岸本能武太の息子さんもまた東大の宗教学の教授になった岸本英夫という方です。

それから、通訳として二人、野口善四郎と野村洋三という人が加わっています。野口善四郎というのはおもしろい人で、英語がよくできる人で、大学の教職などには就かず、おしゃべりが上手で、一種の講談みたいなことをやって仏教を広めます。野口復堂といいます。しかも、アジアの新しい仏教のリーダーたちを日本に呼んだりする、非常に重要な役割を果たしている人です。そんな人が通訳に加わっています。

そのときに日本側の仏教者はどういう立場をとったのかというと、発表の題目や概要を見ますと、いずれも自分の宗派の教えを説くというよりは、日本の仏教は全体として大乗仏教だということを表に打ち出します。恐らく互いに相談していたと思うのですが、その大乗仏教の立場から、仏教とは何かみたいなことを、概論的に説いています。当時、ヨーロッパでも仏教がようやく盛んになり出すのですが、上座部系の仏教で、スリランカなどから入ってくる系統が中心です。大乗仏教というのはまだあまり知られていないわけです。そこで、日本代表はみんな大乗仏教というのを説こうとします。

ただ、発表した人の原稿とかを見てみましても、あまり成功しているように見えません。つまり、理論的に説こうとしている、あるいは、歴史を説こうとしている。それは分かるのですが、すごく魅力的な発信とはなかなか言えません。どうもあまり注目されなかったようです。格好が珍しいので注目されるようなことはあるのですが、むしろこの会議では、ヴィヴェーカーナンダなど、インドの宗教者がすごくモテました。日本の仏教者は珍しがられたけれども、大乗仏教が感銘を与えたというわけでもなかったようです。日本の仏教が内容的な意味で注目されるようになるのは、もう少し時代が下がって、鈴木大拙あたりになるのではないかと思われます。

土宜法龍の発表も、そんなわけで、わりと日本の仏教の概略的な話で、密教のことはあまり前面に出していません。ただ、志としては非常に大きいものを持っています。例えば、「日本仏教各宗略史」で、「今や日本仏教は改革を要するの時也。日本仏教は変じて全世界の仏教とならん」みたいな、ものすごくスケールの大きい話をしています。また、「日本の仏教」という概括的な講演もしましたが、そのときは、「苟も宗教と言へる宗教は皆一味にして、今や我が宗教大会は古来始めて、此の尊ぶべき事実を証明せんとするものなれば」ということで、宗教とはみんな、究極的には一つになるものだと言っています。これは土宜法龍の重要な思想です。このように、土宜法龍という人は、あらゆるものをできるだけ総合していこうという立場をとるわけです。何でも含み込もうという、とても包容力のある人です。

この後、法龍は一八九三年にロンドンに行きまして、そのときに南方熊楠と出会うわけです。熊楠はこの頃、ロンドンの大英博物館にこもっていろいろ本を読んでいた。その大英博物館の案内をしてもらうということで紹介されたようです。その後、法龍はパリに行くわけですが、その時に両者間で膨大な量の手紙のやり取りがなされ、中には、熊楠から書いた手紙は、一通で書簡集の三〇ページ分くらいあります。大変細かい字で、何十枚という手紙で、大論文と言ってよいものです。熊楠が一番乗りに乗って書いたときは、一つの手紙を書くのに二週間ぐらいかかったと言います。その中で熊楠は独自の思想を考え出して展開してい

ます。もう一方の法龍にとっても、年は熊楠がずっと若くて法龍のほうが十歳以上も年上ですが、熊楠の学識に非常に感銘を受けまして、いろいろアドバイスを求めたりしているわけです。そういう中から、この頃の法龍が何をしようとしていたかというのが、ものすごくよく分かります。当時のヨーロッパの新しい仏教の活動や仏教研究についてのいろいろな本を調べようとしていました。それを熊楠に教えてもらい、また、購入してもらおうとしていました。

それからもう一つ、インドの宗教とかチベットとかについても、一生懸命勉強しています。日本仏教だけでなく、インドの、しかも仏教以外のヨーガなどの宗教についても知ろうとしています。非常に重要なのは、チベットにものすごい関心を持っていて、チベットに行こうとするのです。チベット旅行の計画を立てます。それに関するアドバイスも熊楠に求めています。これは結局、実現しませんでした。これは非常に残念なことですが、この後、河口慧海という人が初めてチベットに入って、大旅行をしてたくさんの本や物を持って帰ります。それよりも数年前で、ちょうどヨーロッパでチベットが注目され始めていた頃に、早くもチベットを重視していた。そういう非常に重要なことが分かります。

パリにおいて、法龍はどうであったかといいますと、ギメ博物館というのがあります。エミール・ギメというお金持ちの旅行家が東洋のいろいろな宗教美術品を集めて、日本からもたくさんの仏像などを持って帰っているのですが、それらを集めて博物館をつくるのです。法龍はそこで法要を行うのです。実は、それ以前に浄土真宗の人が一度、二人で報恩講の法要を行っていますが、浄土真宗の法要は儀式としては簡素です。それに対して、法龍は真言宗の御法楽と言われるものを初めて、しかも、東寺の立体曼荼羅の前で行なったということです。これはどういうことかというと、東寺には、立体的な仏像で表わされた曼荼羅がありますが、ギメはそれの模造をつくらせて、それを展示した。そこでどうも法要を行ったようです。そういう非常に興味深いこともやっています。

そんなわけで、法龍という人が書いたものを見ますと、例えば、「秘密教の研究」という文章があって、これは先ほどの全集の中に入っていますが、日本の密教のことを論ずるために、まずチベットの密教のこと、それからインドの、特にヨーガ派の伝統、そういうものから論じ起こしていく。そのような非常に大きい視野を持っているわけです。「真言宗話の一滴」という文章では、「真言宗は横統宗教と称して、何宗にても差別なく……是等の宗派の人々を尽く摂めて、咸な此の真言宗の御利益を戴かすのである」というように、真言宗というのは全部の教えを収める、そういう総合的な教えなのだということを言っています。

また、これはよく問題にされるのですが、一九一二年に三教会同というのがありまして、仏教・キリスト教・神道の各派の代表が集まって相互に話し合うとともに、国とも緊密な関係を持って、国のために尽くしましょうという会を持ちます。宗教が国家に統合されてしまうということであまり評判がよくないのですが、土宜法龍などは積極的にこれに参加しています。法龍としては、国家とも仲良くして、ほかの宗教とも仲良くしていくのがよいと考えます。だから、先ほど言いました真言宗の中では画一派であって、みんなが合同していかないといけないという、そういう思想の持ち主であったことが分かります。

そういう法龍との交渉を通して、もう一方、南方熊楠のほうはどうかというと、南方マンダラという独特の仏教に基づいた世界観をつくっていくわけです。法龍から仏教のことを教えられながら、法龍宛の手紙の中で、図を描きながら説明をしています。そういう意味で、法龍との交流は熊楠にとってもとても重要な意味を持っていました。

いささか時間を超過いたしました。まだ話し足りないことも多いですが、ひとまず私のお話とさせていただきます。ご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。